論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

甲・乙	氏　名	Fadil Abdillah Arifin
学　位　論　文　名	Comparison of Oral Health-Related Quality of Life Among Endodontic Patients with Irreversible Pulpitis and Pulp Necrosis Using the Oral Health-Related Endodontic Patient's Quality of Life Scale	
学位論文審査委員	主　査	一瀬　邦弘　印
	副　査	林　健太郎　印
	副　査	牧石　徹也　印

論文審査の結果の要旨

本研究は、う蝕の進行による不可逆性歯髄炎および歯髄壊死に対する歯内療法が、口腔健康関連QOL（OHRQoL）に及ぼす長期的な影響の差異を明らかにすることを目的として実施された。歯髄疾患は、患者の疼痛や咀嚼機能に影響を及ぼし、生活の質（QOL）の低下を招くことが知られているが、不可逆性歯髄炎と歯髄壊死におけるQOL改善の差異は十分に検討されていない。そこで、本研究では、新たに開発された口腔健康関連歯内療法患者QOL（OHQE）尺度を用いて、治療前後および経時的なQOLの変化を評価した。対象は、不可逆性歯髄炎または歯髄壊死と診断された患者とした。対象者の背景情報、医療・歯科履歴を詳細に収集し、OHQE尺度を用いて治療前、治療後、および2週間後の3回にわたりQOL評価を実施した。統計解析には線形混合モデルを用い、時間経過に伴うOHQEスコアの変化を分析した。研究対象は適格基準を満たした131名であり、その内訳は、男性48名（36.6%）、女性83名（63.4%）で、平均年齢は36.2歳であった。患者群は、不可逆性歯髄炎62名（47.3%）、歯髄壊死69名（52.7%）で構成された。解析の結果、両群ともにOHQEスコアは時間経過とともに有意に改善し（$p < 0.001$）、歯内療法がOHRQoL向上に寄与することが確認された。しかし、群間比較では治療前後および経時的な変化に有意差は認められず、不可逆性歯髄炎と歯髄壊死の間でQOL改善の度合いに差はみられなかった。さらに、患者の治療に対する期待度は治療後も変化せず、治療の結果に関する認識が治療前と同程度にとどまることが明らかになった。以上の結果から、歯内療法は不可逆性歯髄炎および歯髄壊死のいずれの患者においてもOHRQoLを改善することが示されたが、患者の治療に対する期待には変化がなかった。この結果は、歯内療法に対する患者の理解不足や、治療の価値に関する歯科医師側からの十分な説明と同意が得られていない可能性を示唆する。今後、歯科医療従事者は、治療前後における患者の理解度向上を図るため、治療目的や期待される結果について適切に説明し、患者の満足度向上に寄与する必要がある。本研究成果は、新規知見として臨床における患者治療への適用が多いに期待され得る。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は、新規OHQE尺度を用いて不可逆性歯髄炎および歯髄壊死患者のOHRQoLを評価し、根管治療後のQOL改善を確認したが、疾患間の差は認められなかった。また、治療後も患者の期待値に変化がみられず、患者教育の重要性が示唆された。質疑応答では研究の背景や統計解析の妥当性について適切に対応し、医学博士の学位に相応しいと判断した。

（主査 一瀬　邦弘）

申請者は重症う歯の主観的評価スケールを開発し、インドネシアにてその有用性を評価した。治療前後に経時的に評価し、治療後に主観的評価は改善していた。プレゼンテーションもわかりやすく，関連知識も豊富であった。質疑応答も的確であり、学位授与に値すると判断した。

（副査 林　健太郎）

申請者は、不可逆性歯髄炎および歯髄壊死に対する歯内療法の口腔関連QOL尺度であるOHQEを世界で初めて作成し、それを用いて同治療法によるQOLの変化を治療前後で評価することによって歯内療法の有用性や課題を明らかにした。関連領域の知識も豊富であり、医学博士の学位に相応しいと判断した。

（副査 牧石　徹也）

（備考）要旨は、それぞれ４００字程度とする。